

# インドネシア人結核患者への支援について

気仙沼保健所 疾病対策班

技師 木村 亮

# はじめに

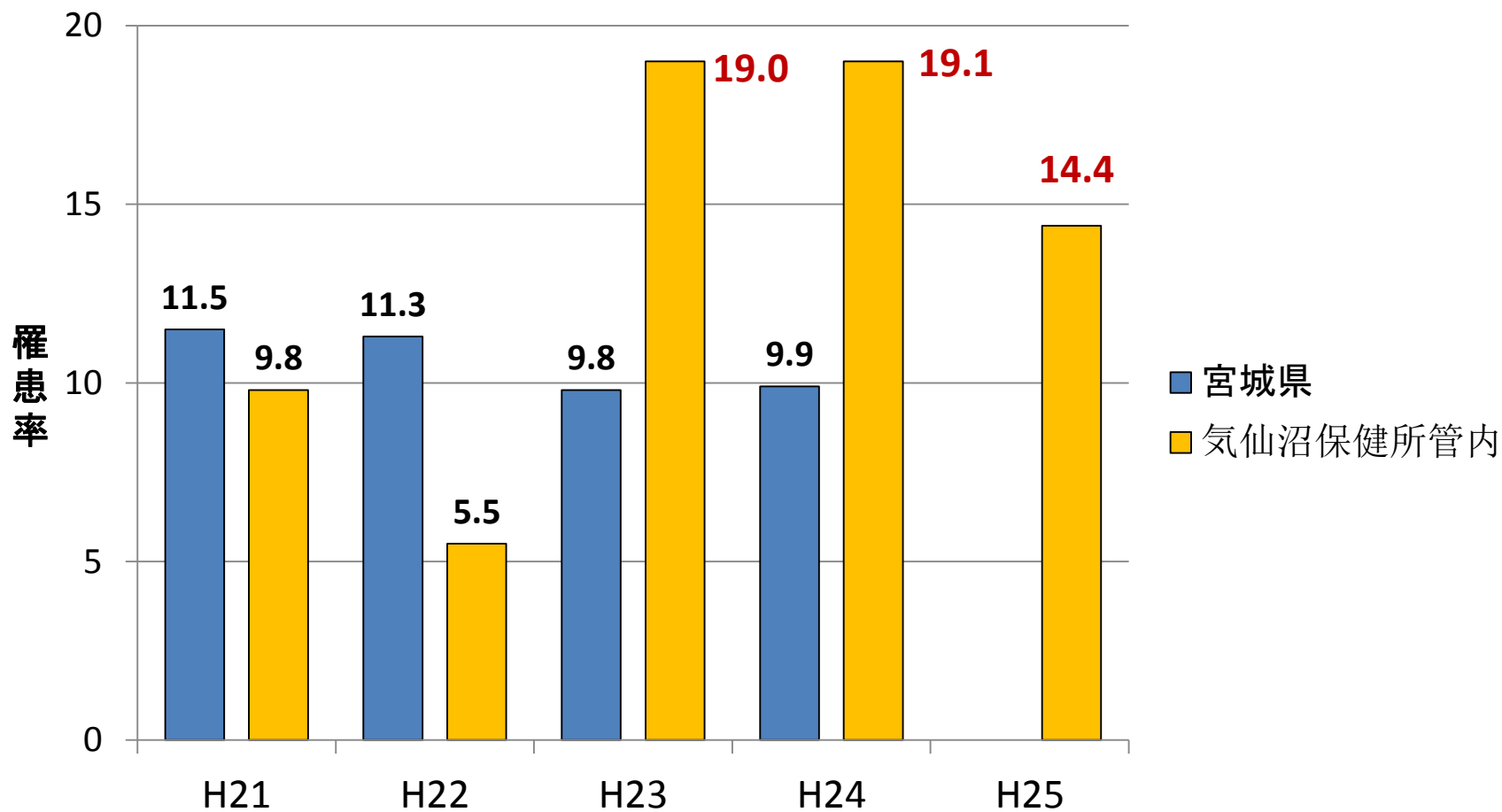
- 気仙沼保健所管内でインドネシア人の結核患者が発生し入院した。入院中から、様々な課題が生じたが、関係機関と連携し、退院・帰国に結びつけた。
- 今回、外国人結核患者への退院までの支援内容について検証し、今後の外国人結核患者支援の一助とするべく事例報告をする。

# 気仙沼保健所の新規結核患者発生数の推移

年次	合計	肺結核活動性					肺外結核活動性	潜在性結核感染症
		喀痰塗抹陽性		その他の結核菌陽性	菌陰性・その他	小計		
		初回治療	再治療					
H25(2013)	18	3	0	4	0	7	5	6
H24(2012)	23	9	0	3	1	13	3	7
H23(2011)	23	5	1	4	0	10	4	9
H22(2010)	5	2	0	2	0	4	1	0
H21(2009)	8	5	0	1	0	6	2	0

- ・震災以降、気仙沼保健所管内の結核患者数は増加
- ・排菌患者の数も増加。

# 結核罹患率(人口10万対)



H25.12.31現在

# インドネシアの結核医療状況

- 世界第4位の患者数で「**高まん延国**」である

(参考)

1位:インド, 2位:中国, 3位:南アフリカ共和国

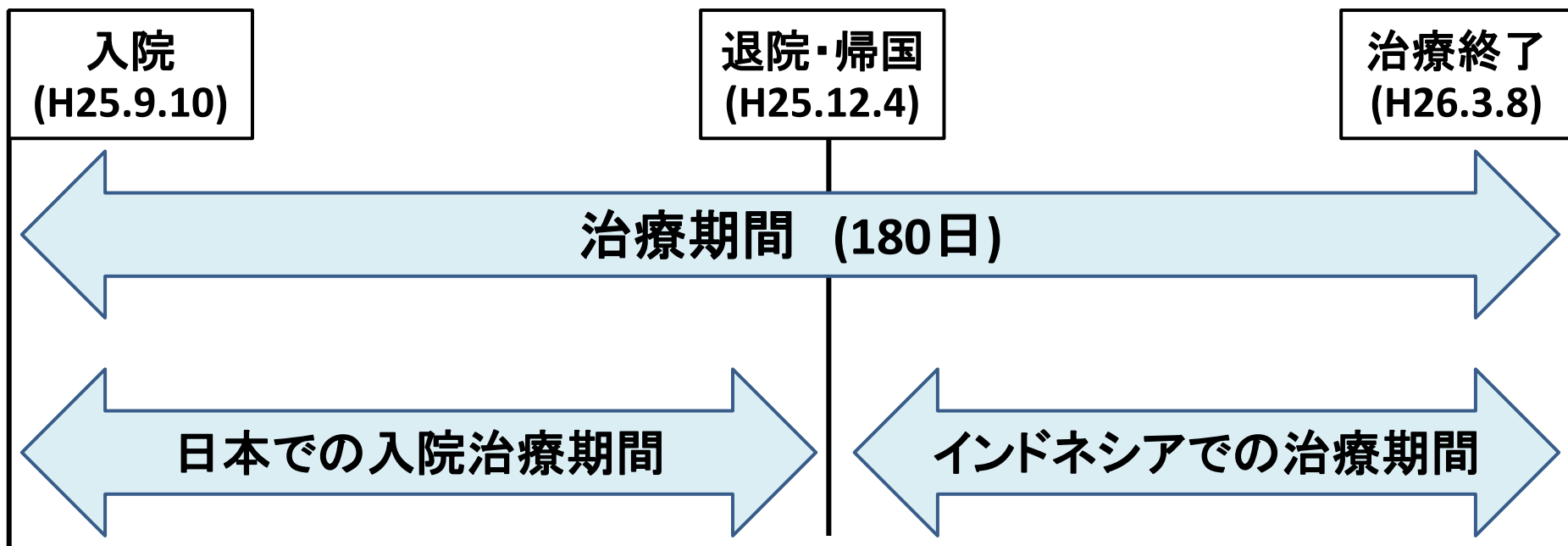
- 結核感染者率と結核による死亡率が東南アジアで最も高い

推定結核患者数(人) (全結核)	推定結核罹患率 (人口10万対)
460,000	185

# 患者概要

- 23歳 男性
- 国籍：インドネシア
- 職業：船員
- 使用言語：インドネシア語のみ
- 法的対処：入院勧告，就業制限
- 全ての抗結核薬に対して効果があった

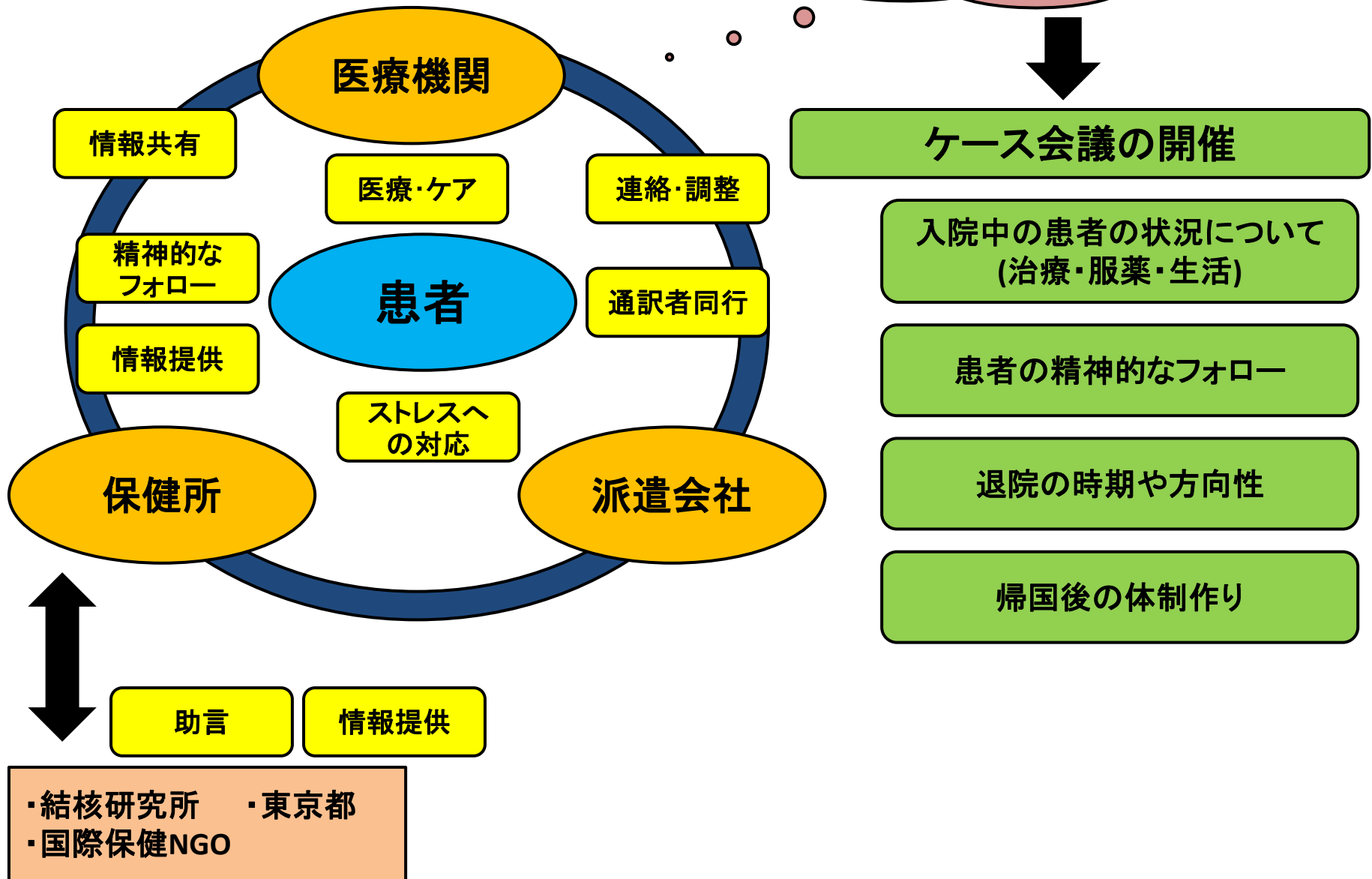
## 結核治療と患者の治療期間について



### <結核治療の原則>

- ①決められた薬 ②決められた量 ③決められた期間 ④毎日飲み続ける

# 関係機関との連携






# 患者支援から見た課題

- ①退院決定後，患者及び派遣会社が帰国を希望したため，日本でどの時期まで入院治療をするのか
- ②患者・医療機関スタッフ双方が感じたストレスへどのように対処するか
- ③帰国後，治療と服薬を継続するための体制構築が可能か

# ①退院時期について

# 退院の時期について

- 退院後の患者の希望は？  
⇒インドネシアへの帰国
  - 当初、関係者間では治療継続が可能なのか？との懸念があった
- 
- ケース会議を何度も開催し、退院時期について検討

## ケース会議内で「退院の時期」を議論した結果

### <最終的な方針>

- 日本で入院治療可能期間まで治療をして、帰国する

### <判断の根拠>

- 患者が日本での治療を希望した
- 結核研究所から日本でしっかり治療してから帰国することが望ましいと助言があった
- 派遣会社から、現地の人にはあまり病院受診をせず、中断の心配もあるとの情報があった
- 入院治療可能期間まで日本で治療をしてから帰国することが、患者にとって最大の利益であると関係者間の認識が一致した

## ②ストレスへの対処

# 入院中にあったストレス

- 患者と医療者間でインドネシア語での会話が不可能であったため、お互いにコミュニケーションが取れなかった

## <患者>

- 結核病棟で隔離された環境(孤独, 自由がきかない)
- 食文化の違いから, 食事摂取に偏りが見られた

## <医療機関スタッフ>

- 通訳なしで医療者側の説明がどの程度伝わっているか不明であった
- 患者の偏食の理由が分からず, 対応に苦慮した

# 入院中のストレスへの対処

<ことば, コミュニケーション>

- 派遣会社からタブレット端末の貸与  
⇒コミュニケーションのツールとして利用
- ケース会議開催時の通訳者同行
- 結核研究所医師からインドネシア語で励ましてもらった

# 入院中のストレスへの対処2

## <食事>

- 通訳者から食事の重要性を伝えてもらった
- 結核研究所医師から食事に関する助言をもらった

## (例)

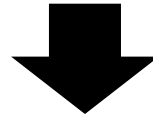
- お茶は砂糖を入れて甘くする
- 揚げ物が好きである
- 生野菜を食べる習慣がない



# 入院中のストレスへの対処3

＜患者への結核治療等についての説明＞

- 医療者としては患者に伝わってるか不安・・・



- 通訳者がケース会議同行時にインドネシア語で説明してもらった
- タブレット端末貸与後は、翻訳ツールを使用  
⇒ 単語だが、治療等の説明も可能になった

③退院後の治療継続のために

# 退院後について

＜ケース会議内で挙げた懸念材料＞

- 退院後も治療・服薬が継続できるか？
- 退院後の治療をインドネシアのどの関係機関につなげるか？
- インドネシアの医療状況・DOTS等実施状況について情報収集が必要

# 退院後について2

## ～治療・服薬の継続のために～

- 保健所が作成したパンフレットを使用
- 通訳者が同行した時は、特に力を入れて服薬継続の必要性を具体的に伝えた



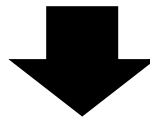
- 患者自身が治療の必要性を理解し、納得して結核治療を継続した

# 退院後について3

## ～帰国後の治療について～

<現地の医療・治療状況や治療体制の情報収集>

- ①結核研究所(特に現地で医療経験のある医師)
- ②派遣会社のスタッフ
- ③保健所長を介して外国人結核患者の多い東京都  
や国際保健NGO



- 現地の医療機関、保健所で治療可能であることが判った

# 退院後について4

## ～帰国後の治療について～

- 患者の出身地の保健所宛の紹介状を作成
- 抗結核薬が途切れることがないように、治療終了までの抗結核薬を処方してもらった
- 帰国直後に派遣会社の現地スタッフがジャカルタの医療機関を受診させることになった



- 患者は無事に退院帰国となった

# まとめ

## ～患者支援がうまくいった要因～

- ストレス環境下でありながら、患者は治療に対して意欲的で忍耐強さがあった
- 言葉や習慣・文化の違いなどがありながらも、医療機関スタッフの献身的な医療およびケアがあった
- 入院生活の中で挙げられた課題に対して、ケース会議等を開催して迅速に対応した
- 患者の治療完遂に向けて、医療機関・派遣会社・保健所が緊密に連携し、目標を共有しながら支援ができた

# 課題

- 宮城県の「結核予防の手引き」の中で、外国人患者への対応に関する項目の充実が必要
- 宮城県で登録の多い国の患者用の結核パンフレットの作成が必要
- 県内での外国人結核患者の支援事例やデータ収集が必要
- 外国の医療、結核治療対策の情報を収集する方法について整備が必要



# 参考文献

- 公益財団法人結核予防会 (2013) 結核の統計2013
- 平成19年9月7日 健感発第0907001号 厚生労働省健康局 結核感染症課長通知 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律における結核患者の入退院及び就業制限の取扱いについて 第2 退院に関する基準
- 公益財団法人結核予防会 stop TB by DOTS 「結核!?!でも心配しないで」 資料(外国人結核)  
(<http://www.jata.or.jp/rit/rj/TB2008/start.html>)

ご清聴ありがとうございました



かんせん / ックアウト

気仙沼保健所疾病対策班オリジナルキャラクター